

3月8日(月)

報告: 渋谷 祐介

---

初日の昼食は SGH に提供して頂いた。ピラフに白身魚のカレー煮、野菜の炒めもの手羽先焼きなど、正確な名前は分からないが美味しい昼食を頂いた後は我々のプレゼンテーションの時間である。受け入れ先の先生の参加具合から順番が決められ、初回は我々東北大3人の発表であった。

佐藤直実さんによる宮城や仙台の説明、日本のスーパーローテーションによる研修システムの説明に続き、私が産婦人科で行った手術など2年間の研修の報告し、最後に閻さんの麻酔科や循環器での研修を報告した。SGHの麻酔科教授 Dr. Lim Boon Leng から「研修医は何時から何時まで働いているのか」との質問に対し「7時から21~22時」と答えたところ、どよめきが起こってしまった。少し言いすぎたかも知れないが、21時までは良くある事なのでよしとする。SHGのスマートな研修医は仕事が速いのだろう。

2番目は富田さん、伊瀬さんによるウイルス性脳症による痙攣の症例の発表。ステロイドを投与することの是非に対し、SHGの形成外科の教授から鋭い質問を受けた。

3番目は西條さん、鈴木さん、仲江川さんらによる外科手術を要した魚骨刺入の症例報告が行われた。日本と同様に魚を食べる文化のあるシンガポールの先生方も興味深々であった。「内視鏡で取ることはできなかったのか」という質問があったが、魚骨が完全に埋没しており、内視鏡で確認できなかったことなどから頸部からのアプローチになったことを説明した。低侵襲手術を行いたいという希望は万国共通である。

4番目は林田さんによるキノコ中毒の症例。シンガポールでもキノコを良く食べるため、好評であった。

5番目は古積さんによる原発性アルドステロン症の報告。副腎静脈サンプリングを行い、両側性にアルドステロン値が高かったため、内服にて加療したという内容であった。

最後は鶴飼さん、星さんが日本とシンガポールの医療事情を比較し、報告した。人口当たりの医師数や合計特殊出生率など、日本よりシンガポールのほうが低いということに、両国の参加者とも改めて驚いていた。

我々の発表の後は翌日お世話になる診療科の先生との懇談があった。我々は新生児科の Dr. POON (潘) に師事することとなった。POON 先生は National University of Singapore (NUS) を卒業後11年目で、昨年新生児科の専門医を取得したということであった。シンガポールでは各診療科の定員が決められており、厳しい選抜試験を受けて specialist になること、病棟は患者の収入により A~C にランク分けされており待遇に雲泥の差があることなど、日本とは全く違うシステムであることの説明を受けた。その後、我々の今後進みたいと考えている進路、日本の医学教育制度などを拙い英語で紹介し、POON 先生は粘り強く聞いて理解しようとして下さった。翌日の集合時間などを確認し、その日の研修は終了となった。